

ロンドン・ケンブリッジ・パリ

宗教文化の旅

明治大学助教授
駒沢女子大学講師
東方学院講師

阿部 慈園

そしてしばらくの養生をよぎなくされたからであつた。

黒田大圓理事長のおさそいをうけて台湾交流の旅に赴いたのは、平成二年十二月(十一日～十四日)のことであつた。それから五年と三ヶ月が過ぎて、久しぶりに海外に出かけるチャンスを得た。というのは、平成三年の晩春から初夏のころ左アゴに悪きものが発見されすぐ手術、

横浜赤十字病院の主治医林洋先生の出国許可をいただいて、忙しい春彼岸会法要の前であつたが、その準備を皆さまにお願いして、思いきつてロンドン・ケンブリッジ・パリに遊んだ(三月十日～十七日)。

今回の旅の目的は、大英博物館所蔵の仏像お

よびヒンドウの神像を拝すること、パリのルーヴルとギメ博物館を訪ねること、招待状をくださったケンブリッジ大学（キングス・コレッジ）のジョージ・パティスン教授と「キリスト教と仏教の対話」をすること、同地に在外研究中の明治大学教授山口泰司先生と善光寺海外留学僧派遣育英生である清水晶子さんに会うこと等である。以下、理事長のおはからいにより旅で見たこと聞いたことを少しく記めようと思う。

2

三月十日。JAL 401号機は、快晴の成田空港を十二時十五分に離陸し、ノンストップで約十一時間三十分を要して、ロンドン・ヒースロー空港に着陸した（現地時間で同日午後二時四十分）。日本との時差は九時間である。

ブリタニア・インターコンチネンタルといういかにもイギリス風のホテルにおちつく。部屋

は広く、ゆったりとしているが、暖房はひかえめだ。荷物は大小まぜて六、七個あったので、思い切って十ポンド紙幣のティップをボーイにわたしたら、ボーイは少しく驚いて「サンキュー」。

三月十一日、十時十五分キングスクロス駅からケンブリッジに向かう。五十五分を要しノンストップで同駅に到着。途中は霧で、車窓の景色はほとんど楽しめず。驚いたことに、乗車の時も、車中も、降りる時も切符の点検がまったくない。紳士・淑女として信用しているからという。もし無賃がばれたら、相当のペナルティを払うという。（ただし帰りは、車中で少しくリンゴのほっぺの青年車掌の点検をうけた）

ケンブリッジ駅ホームで山口先生の出迎えをうける。ほぼ二年ぶりの再会を喜ぶ。先生の車で、街なみおよびいくつかのコリッジ（college）をカレッジと現地の人々はいわないという）を

案内していただく。ここには二〇ほどのコリッジ(学寮)があり、そのうち(1)キングス、(2)トリニティ、(3)セントジョーンズが三大コリッジである。これらが兼併統合してケンブリッジ大学(University of Cambridge)と称する。なお、アメリカのカレッジとちがい、イギリスのコリッジは、大学から大学院博士課程までをカヴァーする。

街と大学の印象を同行の家内の手記に托そう。

車窓から見るケンブリッジの街はまるで絵のようで、なつかしく心がおだやかになる。出口保夫著『イギリス四季暦』の雄大氏のイラストが頭にうかぶ。時間が止まってしまったような街。大木と緑の芝、スノードロップ(雪のしずく)の白、クロッカスの紫と黄、ヒヤシンスと水仙はいまだつぼみ。静まりかえった大学構内。窓という窓に勉

強している学生の影。ケム川にはおしどり・かもめ・白鳥。北海から直接吹きつける風は冷く、頭の芯をキーンと痛くさせる。

夕方、街から車で三〇分ほどのイリーター大聖堂を訪う。何と六七三年の創立と聞く。近くのパブのドロツとしたギネス・ビール(エール)も美味しかった。

同夜は山口先生の奥さま手づくりのおいしいビーフシチューをいただく。清水晶子さんとお嬢さんの菜生子さんも寮からかけつける。先生宅で拝宿させていただく。

三月十二日。清水さんが留学するルーシー・キヤヴェンディッシュ・コリッジ(Lucy Cavendish College)を訪ねる。寮の前庭には桜の花とみまがうほどのアーモンドの木がかれんなピンクの花を咲かせていた。清水さんは昨年九月に同コリッジの大学院コースに入り、本年八月末まで



清水晶子女史と筆者

ルーシー・キャヴェンディッシュ・コリッジの校章



に一万二千字よりなる「インドのジャイナ教諸派の儀礼の比較研究」(A Comparative Study of Ritual Practice in Different Jain Sects in India)と題するエム・フィイル (M.Phil.) 論文をまとめつつある。寮生活の良さを彼女はいう。

「僚友は困っていると何かと親身になって助けてくれます。特に英語についてクラスメートは助けてくれます。ノートも貸してくれます。ただし、個人的な領域には決して踏みこみません。慎しみ深く、いらぬおせっかいを焼きません。大人の間関係を持します」と。清水さんは、朝から晩までの研究三昧で日本にいる時より、より若々しく見えた。

山口泰司先生は一昨年(平成六年)四月より二年間の在外研究のチャンスを得てケンブリッジ大学のキングス・コリッジの客員研究員かつ、ハイ・テーブル (High Table) のメンバーとして、比較宗教学とりわけ科学と宗教との関係、

その境界領域と接点を求める研究をされている。具体的にはダニエル・デネットの科学哲学とインドのオーロビンドの宗教哲学の比較研究である。

先生の愛娘・菜生子さんもウルフソン・コリッジの神学・宗教学科の学部一年在学中で、(1) 倫理学、(2) ユダヤ教、(3) キリスト教とヒンドウ教の対話の三コースを採り、外国語として古代ヘブライ語を週三回学んでいる。近い将来『旧約聖書』を原語で読めるようになるためという。

筆者とパティスン教授 (Professor Dr. George Pattison, Dean of Chapel and Director of Studies in Theology) との対論のほんの一条もいそえておこう。ケンブリッジが誇る高名な教授方の写真が飾られた、風格のある教授控室で質素な昼食をいただいきながら、

「曹洞宗の教義の特徴とは何ですか?」
とまず聞かれた。山口先生に助けられつつ、た

どたどしいインドアクセントの強い英語で、

「悟りを目的とした修行ではなく、証上の修
です。師から弟子へ法(真理、ダルマ(dharma))
が、一器の水が一器に移されるがごとく伝え
られます。そのダルマとは、いわば何も引か
ず、何も足す必要のないものであります」
と説明した。教授は間髪を入れず、

「では、発達も発展もないのですか」
と切りかえす。小生は、

「完結し、完全なものならば、発達も発展も
必要ありません」ややあって「あたかも『バ
ガヴァッド・ギーター』の目的のための行為
ではなく、行為のための行為、スヴァダルマ
(svadharma)としての行為、ヴィシユヌ神
に捧げられた行為に似ています」

と答えた。教授はむつかしい顔をされていたが、
少しはわかったように、わたくしには見えた。

3

三月十二日午後四時、ロンドンに戻る。タク
シーで大英博物館 (British Museum) に乗りつ
ける。五時までの一時間弱、東洋室のインド・
コレクションを急ぎ見る。明日もまた来ること
にする。夜は、やはり明治大学からロンドン大
学へ在外研究のために滞英中の三上昭彦先生
(イギリスの教育制度の研究)のお話をうかが
いながら夕食をとにする。ブリタニア・ホテ
ル再泊。

三月十三日の午前および午後の二時すぎまで、
ふたたび大英博物館で時をすごす。インド・コ
レクションを再覧する。奈良康明先生編集『N
HK大英博物館 インド・仏教美術の開花』(日
本放送出版協会)所収の写真の現物を目のあた
りにすることができ、感激もひとしお。アマラー
ヴァティーよりの欄楯等はガラス扉とびらでさえざら

れていて、かいま見るのみであった。

同室の中央アジア・コレクションもつぶさに見た（長沢和俊編『同 中央アジア・東西南の十字路』参照）。加えて、ロゼッタ・ストーンに手を触れることができたのはうれしきことであつたが、エジプトの棺とミイラ特に年若い王子のミイラを見た時は「ここまで持って来なくとも」と痛ましく胸つぶるる想いがした。

三時には、ロンドン大学の教育研究所に赴き、三上先生から同研究所の図書館を案内していただいた。この研究所は教育学に関しては世界一の規模を誇っているという。つづいてアジア・アフリカ研究センター、ソアーズ (SOAS, School of Oriental and African Studies) の図書館にも連れて行っていただく。同日本研究センターのコーディネーター、クレア・ドールン女士よりプロスペクタス等の資料をもらう。鎌倉・豊島屋の「明暗」をおみやげにとわたした

らひどく喜んでくれた。彼女は二年間、九州に留学したという。東方学院講師の津田真一先生（本年四月より国際仏教学大学院大学教授）が平成七年一月から三月までこの客員教授をつとめたが、そのことを知っているかとなぜねたが、はかばかしい答えはかえってこなかった。同夜もブリタニア・ホテル泊。明日はあこがれのパリだ。荷物のパッキングに一時間もかかってしまった。

4

三月十四日。バッキンガム宮殿で記念写真を撮り、ウェストミンスター大聖堂にお参りして、ウォータールー駅に向かう。ウォータールーはベルギー・フランスのワテルローに相応する。同駅からユーロスターに乗り込む。ドーヴァー海峡を海底トンネルで通過するのはほんの二十分かっただけであつたが、その乗り心地は絶

妙であった。パリ・ノル（北）駅までには三時間ほどを要した。

ニッコー・ド・パリ・ホテルで荷をほどこき、身体を休めていると、部屋の電話がけたたましく鳴った。萩原伊玖子さん（夫君は前欧州東銀支店長）である。

「明日お会いしてもよいのですが、もしよろしければ、ブローニユの森を散策しませんか？ 六時三〇分にはホテルにうかがいます」

と。萩原さんは明治大学の宮内（萩原）芳子助教授（仏文専攻）の義理のお姉さん。小生が宮内先生に「今度パリに行きます」といったら「では兄嫁に会ってください」とわざわざパリに連絡をとってくださった。彼女と小生とは平成三年四月明大奉職の同期の桜である。

ホテルのロビーで、萩原さんとは昭和六十二年中村元先生を団長とする、東方学院韓国宗教

文化の旅で一緒したことを思い出した。彼女はとうにそのことに気付いておられたが、当方は失礼してしまった。パリに来てまで、中村先生のおかげ、東方学院のご縁を感じて家内ともにもありがたく肝に銘じた。

たそがれのブローニユの森の散策。くれなずむ細長い人造湖をぐるりとまわりながら、光りに照らし出されるエッフェル塔の時々眺望は幻想的でした。湖のそばのごく簡易なレストランで、彼女からフランス料理の手ほどきをうけながら、パリ第一夜を芳醇なワインの酔いとともになすました。

三月十五日。ギメ博物館の本館は修復中で入館不可であったにもかかわらず、B・フイーエ（Fouille）先生の特別のはからいでクメールのジャヤヴァルマン七世の胸像やターラー女神像等を拝することができた。また、『日本の開国―エミール・ギメ あるフランス人の見た明治』

(創元社、原題は“Grand le Japon s'ouvrit au monde”)の著者の一人、尾本圭子先生に同館で会い、持参した同書にサインをいただいた。別館の日本コレクションは二時間を費やして、萩原さんの懇切丁寧な説明をうけながらつぶさに見ることができた。近くのチエルニスキ博物館のマンダラ等も圧巻であった。

その夜は、萩原さんよりかつて修道院であった所に建てられたというレストランに招待された。エスカルゴと鴨の料理に堪能した。すでに桜咲くニッコー・ド・パリに戻る。明日の夜は、シャルル・ド・ゴール空港から成田へ。ふたたび荷物のパッキングに精を出す。

三月十六日。ルーヴル博物館へは家内と二人で行く。モナリザの微笑とミロのヴィーナス像に会えればよい。モナリザの絵にはガラスのおおいがかけられていたが、本物はやはりちがう。いく度かシャッターを押したのだが、帰国後の

現像写真の中にはモナリザ夫人はなかった。ミロのヴィーナス像はちゃんと写っていた。ガラス等のおおいがまったくなく、触れようと思えば触れることができる。オリジナルのヴィーナスはやはりすばらしい。

ルーヴルを出て、セーヌ河ぞいの道を散策しながら、シテ島まで歩くことにした。途中、たぐさんの簡易の本屋さんを横目にしながら、ノートル・ダム大聖堂に着く。一一六三年の着工でその後二五〇年をかけて完成した。「バラ窓」と呼ばれるステンドグラスは、自らを仏教徒であることを忘れさせるほどだ。寺院のすぐわきにある喫茶店(カフェ・ノートル・ダム)で、家内はカフェとケーキ、小生はビールを注文し、少しく腹ごしらえをして、いよいよ帰国の途についた。

(横浜善光寺留学僧育英会参与)

(一九九六・四・一一)

